金　生　川

川之江町は、金生川の堆積作用によりつくられた平野に位置する。

金生川は、徳島県との県境に端を発し、川滝、金田、上分、金生を通り、瀬戸内海に流れ込む。金生川の流路は、戦後、洪水被害をなくすために付け替えられており、かつては、現在の金生橋あたりから北へ曲がり、川之江漁港へと流れていた。港通りから川原町続く現在の国道１１号線は、金生川を埋め立てたものである。

金生川は、川之江町の歴史・産業と大きく関わりのある川である。金生町にある向山古墳や川之江町にある宝洞山古墳などの石室に使用されている巨石は、法皇山脈から金生川の流れを利用して運ばれたものと考えられている。また、地場産業である手すき和紙産業も金生川の水を利用して発展してきたものである。

金生川は、明治から大正にかけては「きんしょうがわ」と呼ばれていたが、いつのころからか「きんせいがわ」と呼ばれるようになったようである。

「金生川」の名は、流域に金生、金川、金沢などの地名も残ることから、かつては砂金がとれていたことに由来すると考えられている。宇摩地方には、７世紀初め、渡来人である金集史挨麻呂（かねあつめのふひとやからまろ）の存在も認められ、古来より砂金等が採取されていたようである。